城西国際大学紀要　第28巻　第８号　2020年３月　81-91

〈研究・調査報告〉

短期海外研修プログラムによる看護学生の異文化間コミュニケーションスキルの向上

宮澤　純子　・　井上　映子

【要旨】

目的：在日外国人数、訪日外国人客数の増加により、看護系人材には国内においても異なる国や地域・人種・文化への対応が求められている。本研究では、9 日間の短期海外研修による看護学生の異文化間コミュニケーションスキルの向上について、研修前後の英語力客観テストの結果とソーシャルスキル尺度得点から明らかにすることを目的とした。

方法：研究デザインは 1 群事前事後テストによる準実験デザインである。対象は 2018 年 4 月に国内私立 A 大学の看護系学部に入学し､9 日間の短期海外研修に参加した 112 名とした。事前事後テストは自記式質問紙を用い、研修前後に実施した。質問紙の内容は①年齢および性別、②学生の海外経験、③英語力客観テスト、④ソーシャルスキル、⑤その他（海外研修の満足度など）であった。

結果：研修前後の調査すべてに回答した 106 名（有効回答率 94.6%）を対象として分析した結果、研修後は研修前と比較して、①英語力では、リスニングの「短い会話やナレーションの基本的文脈を推測する」（$z=7.62, p<.000$）やリーディングの「文書にちりばめられた情報を関連付けることができる」（$z=4.77, p<.000$）など 10 能力中 6 能力の正答率が有意に高くなった。一方、長めの会話の理解については正答率が有意に低くなった。②研修後のソーシャルスキル得点は「感情統制」以外の 5 つの下位尺度と総得点（$z=7.49, p<.000$）で研修前よりも有意に高くなった。③研修後の英語力とソーシャルスキル得点に有意な相関はなかった（$r=0.017$～0.119）。

結論：研修後は、英語の短い会話やフレーズから文脈を理解する能力やソーシャルスキル得点が有意に高くなり、短期海外研修での体験を通して、向上するコミュニケーションスキルの詳細が明らかになった。

キーワード：異文化間コミュニケーション、多文化共生、文化的謙虚さ、海外研修、語学力、ソーシャルスキル

１．はじめに

(1) 文化と看護

Leininger（1978）は、文化とは『特定の人口集団によって様式化された思考や行動の指針となる固有の価値観、信仰、行動規範、生活様式の実践をともなう学習され代々継承されてきた知識である』と定義した。これまで文化は民族や人種、宗教、地域に特有のものと考えられてきたが、インターネットの普及は情報や知識の共有に変革をもたらし、文化には新たに性的指向や社会経済的地位のような領域も含まれるようになった（Hughes et al, 2019）。看護の対象となる人々の文化を理解し、それに基づいて看護を提供することは人々の幸福、健康、障害、死などのあり方を考える上で不可欠である（Leininger, 2002）。さらに、医療者が人々の健康に対する社会や文化の影響を認識し、文化を尊重し、文化に配慮して関わることができれば、より医療が受けやすくなり、医療の質を高めることにもつながる（Cooper-patrick et al., 1999）。多様な文化が存在する中で、文化を理解することは、文化に関する知識を学ぶことにより達成して終わるというものではなく、未知の文化を理解するために、自分を振り返りながら生涯にわたって取り組むものとされ（Tervalon & Murry-Garcia, 1998）、これは文化的謙虚さ cultural humility と呼ばれている。つまり、文化に配慮した看護を実践することは、文化の異なる対象への看護にとどまらず、看護職者が文化を理解しようと試みることを通して、これまでの自分の経験に基づく価値や意味を振り返りながら看護実践能力を向上させていくプロセスであるといえる。

(2) 日本における多文化理解と異文化間コミュニケーションの必要性

世界経済のグローバル化等により在留外国人数や訪日外国人客数は増加し、昨年度の在留外国人数は 273 万 1,093 人（前年度比 6.6%増）（法務省，2019）、訪日外国人客数は 3,119 万 1,856 人（前年度比 8.7%増）（日本政府観光局，2019）でいずれも過去最高となった。海外はもとより国内の看護の現場においても、これまで以上に異なる国や地域・人種・文化への対応が求められており、基礎看護教育では看護実践に必要な多様性の理解やコミュニケーション能力の育成をめざしている。2017 年 10 月に策定された看護学教育モデル・コア・カリキュラムでは、看護系人材として求められる基本的な資質・能力のひとつにコミュニケーション能力をあげ、その能力について『人々の相互の関係を成立・発展させるために、人間性が豊かで温かく、人間に対する深い畏敬の念を持ち、お互いの言動の意味と考えを認知・共感し、多様な人々の生活・文化を尊重するための知識、技術、態度で支援に当たることを学ぶ』と示した（文部科学省，2017）。

共通言語を持たない看護師-患者間では、情報交換がうまくいかず、看護の質が低下しやすいと言われている（Gerrish et al, 2004）。さらに言語や文化が異なる人々とのコミュニケーションは、単なる情報交換にとどまらず、人とのつながり・関わりを通した相互理解を目的とし

ており、それぞれの文化についてコミュニケーションの対象と同じ言語で説明できることに加えて、共感や非言語コミュニケーション等の能力も必要である（Byram, 1997）。

（3）異文化間コミュニケーションスキルの向上の方法としての短期海外研修

Campinha-Bacate（2002）は、文化を理解してヘルスケアを提供する能力の 5 つの構成概念として「文化的気づき」「文化的認識」「文化的アセスメントスキル」「文化的出会い」「文化的モチベーション」をあげ、保健医療専門職の文化的能力プロセスアセスメント尺度改訂版（Inventory for Assessing the Process of Cultural Competency among Healthcare Professionals-Revised: IAPCC-R）を開発し、大学での看護教育カリキュラムの評価等に利用した。この IAPCC-R 日本語版を用い、1,035 名の日本の看護師を対象として行った調査では、「文化的気づき」だけは一定のレベルに達したものの、それ以外の得点は欧米のデータと比較して有意に低かった（Kawashima, 2008）。移民が多く、多様な人種・文化的背景を持つ人々が生活する米国や欧州では、看護師になる以前から多文化に触れる機会が多く、日本の状況とは異なる部分もある。このため、異文化コミュニケーションスキルの向上に異なる側面があることも考えられる。一方、海外研修は、看護学生が異なる文化を知り、具体的な文化の違いを認識し、それに適応しようとし、肯定的にとらえることができるようになるというプロセスを経ることから、異文化間コミュニケーションスキル向上の方法として、有効であることがいくつかの研究で示されている（Koskinen et al., 2004; Williams, 2005; Ruddock & Turner, 2007; Gilliland et al., 2016）。日本の学生においても、短期間で多文化に触れることによって同様の効果が期待される。

国内の先行研究では、短期海外研修プログラムの効果として、訪問国のイメージの好転、国際理解能力、ソーシャルスキル、チームワーク能力、語学の学習意欲の向上、主観的な英語力の向上などが明らかになっており（香月&荒井，2009；宮澤ら，2012, 2014；森&鈴木，2014；浅野，2015）、短期間の研修でも異文化間コミュニケーションスキルが向上することが示されている。ただし、これらのコミュニケーションスキルの評価は学生の主観によるものが多く、特に英語力の向上を客観的な指標で示したものはほとんどない。異文化間コミュニケーション教育に関する問題として、報告は多いもののアウトカムが明確ではないこと（Chant et al., 2002）、学生による主観的評価は患者評価とは必ずしも一致していないこと（Calvillo, 2009）があることが知られており、日本に限らず異文化コミュニケーションスキルの評価には課題があるといえる。

これらのことをふまえて本研究では、看護学生の異文化間コミュニケーションスキル向上について、9 日間の短期海外研修前後の看護学生の英語力客観テストの結果とソーシャルスキル尺度得点から明らかにし、多様な文化や価値観への対応が求められる看護師のコミュニケーションスキル向上のための教育方法を知る手がかりとすることを目的とした。

２．方　法

(1) 研究デザイン

研究デザインは 1 群事前事後テストによる準実験デザインである。研修には学年全員が参加することから、参加しない比較群は設定せず、1 群事前事後の比較とした。事前事後テストは自記式質問紙を用い、米国での多文化理解研修プログラム（9 日間）前後に実施した。

(2) 研究の対象と期間

研究は 2018 年 4 月に国内の私立 A 大学の看護系学部に入学し、2018 年 5 月の研修に参加した学生のうち研究への参加に同意した 112 名である。調査は 2018 年 4 月～6 月に実施した。

(3) 研修の内容

研修プログラムは多文化理解を目的として計画されており、1 年次全員を対象として 2012 年より毎年実施されている。研修の内容とねらいについて表 1 に示した。研修の内容は、言語・宗教・食事に配慮するなど多文化に対応したケアを提供する医療施設の見学、ホームステイ、文化と看護・コミュニケーションに関する英語での講義、現地看護学生との交流や看護技術演習への参加などである。

(4) 質問紙の内容と測定用具

質問紙の内容は①年齢・性別、②学生の海外経験、③英語力客観テスト、④ソーシャルスキル、⑤その他（海外研修の満足度など）とした。英語力の測定は TOEIC Listening & Reading Test Abilities Measured を、ソーシャルスキルの測定には成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川，2005）を用いた。

Test for English for International Communication （以下、TOEIC） Listening & Reading Test Abilities Measured

TOEIC Listening & Reading Test は、1979 年に開始された。以前はグローバルな職場での英語能力の測定の試験とされていたが、2006 年には世界的に日常で用いられる社会あるいは仕事上のコミュニケーションを反映するように設問が改訂された。さらに 2018 年には出題数や試験時間、難易度等の変更はないものの、受験者とスコアの利用者両方のニーズに合わせ、その時点で使用されている言語により近づくように改訂された（Cid et al, 2017）。Abilities Measured（項目別正答率）はリスニング、リーディングそれぞれ 5 つの能力についてそれに対応する問題の正答率を示している。Abilities Measured はそれぞれのフォームによって難易度が一定ではないことから、得点がそのまま習熟度を表すものではない。このため本研究では、正答率から受験者の英語力の特徴を推測するという目的で使用した。

表 1　多文化理解を目的とした海外研修の内容とねらい

日次		日程	ねらい
1		出発 ホームステイ開始	出入国・検疫等の手続きを知る 異なる文化と生活を体験する
2		博物館（2 施設）　見学	日米の歴史・文化を知る
3	AM	入学手続きとオリエンテーション	安全・マナー・受診方法等を知る
	PM	Nursing School 見学 （施設見学・技術演習） 看護学生との交流（RN プログラム）	学生主体の学習方法を体験する 日米の看護教育の共通・相違点を知る
4	AM	Medical School 見学 講義『多様性を尊重した医学教育』	学生や地域の多様性に配慮した 医療者育成について知る
	PM	講義『看護の ABCD』 看護学生との交流（BSN プログラム） 医療英語ワークショップ	看護の基本を英語で学ぶ 学部教育のカリキュラム等を知る 専門用語のボキャブラリーを増やす
5-6		医療施設見学 （2 日間で 2〜3 施設を見学）	文化に配慮した医療の実際を知る
7	AM	講義『異文化間コミュニケーションと医療専門職』	異文化間コミュニケーションを学ぶ
	PM	修了式・研修のまとめと発表	研修で学んだことを共有する
8-9		移動日・帰国	

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度

ソーシャルスキルは“対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念”（相川，1996）である。成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の 35 項目は「関係開始」（相手とすぐにうちとけられる等 8 項目）、「解読」（表情やしぐさで相手の思っていることがわかる等 8 項目）、「主張性」（自分が不愉快な思いをさせられたときにははっきりと苦情を言う等 7 項目）、「感情統制」（感情をあまり面にあらわさないでいられる等 4 項目）、「関係維持」（相手の立場を考えて行動する等 4 項目）、「記号化」（表情が豊かである、身振り手振りをまじえて話すのが得意である等 4 項目）の 6 つの下位尺度で構成されており、関連尺度との相関や再検査法によって信頼性・妥当性が確認されている。回答者はそれぞれの項目について「ほとんどあてはまらない」（1 点）〜「かなりあてはまる」（4 点）のいずれかを選択する 4 段階のリカートスケールである。得点が高いほどソーシャルスキルが高いと評価

するが、「感情統制」尺度は他の下位尺度との相関が低く、逆転した相関となっており異質であると考えられている（相川，2005）。

(5) 分析方法

分析には統計ソフト IBM SPSS Statistics Ver.25 を使用した。研修前後の英語力およびソーシャルスキルの比較は Wilcoxon の符号付順位検定によって、英語力とソーシャルスキルの相関はケンドールの順位相関係数によって検討した。

(6) 倫理的配慮

本研究は城西国際大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 03H180069）。研究対象者には、研究の背景と目的、研究方法、研究への参加は自由意志であること、研究参加の同意は撤回できること、研究参加による利益・不利益、個人情報の取り扱い方法および匿名性の保持、得られたデータは研究目的以外には使用しないことについて文書で示し、口頭で説明した。研究参加への同意は同意書への署名によって確認した。

３．結　果

(1) 回収率

研修前の調査は 112 名中 112 名（回収率 100.0%）、研修後の調査は 112 名中 106 名（回収率 94.6%）の回答を得た。前後の両方の調査に回答した 106 名（有効回答率 94.6%）を分析対象とした。

(2) 対象者の属性

対象者の性別は、男性 11 名（10.4%）、女性 95 名（89.6%）であった。年齢は 18～20 歳（平均=18.7, SD=0.29）であり、18 歳は全体の 94.3%を占めた。

(3) 対象者の海外経験

今回はじめて海外に渡航したという学生は 59 名（55.7%）、1 ヶ月未満の滞在経験者は 41 名（38.7%）、1 ヶ月以上の滞在経験者は 6 名（5.6%）であり、はじめて海外に行く学生が半数以上であった。

(4) 研修の満足度

10 点満点で評価した研修プログラムの満足度の平均は 8.6 点（SD=1.29）であった。

(5) 研修前後の英語力とソーシャルスキル

研修前後の TOEIC Abilities Measured 正答率とソーシャルスキル得点を表 2 に示した。

リスニングの能力では、「短い会話等の基本的文脈を推測できる（L1）」（z=7.62, p<.000）、「短い会話等において詳細が理解できる（L3）」（z=4.84, p<.000）、「フレーズから目的や暗示された意味を理解できる（L5）」（z=5.44, p<.000）の正答率が研修後に有意に高くなり、一方「長めの会話等の基本的文脈を推測できる（L2）」（Z=3.51, p<.000）、「長めの会話等において詳細が理解できる（L4）」（z=2.49, p=.013）の正答率は研修後に有意に低くなった。リーディングの能力では、「文書の中の情報をもとに推測できる（R1）」（z=3.02, p=.002）、「文書にちりばめられた情報を関連付けることができる（R3）」（z=4.77, p<.000）、「文法が理解できる（R5）」（z=5.97, p<.000）の正答率が研修後に有意に高くなった。

研修後のソーシャルスキル得点は「関係開始」（z=3.44, p=.001）、「解読」（z=4.98, p<.000）、「主張性」（z=5.30, p<.000）、「関係維持」（z=2.53, p=.011）、「記号化」（z=2.28, p=.023）の 5 つのサブスケールと総得点（z=7.49, p<.000）において、研修前よりも有意に高くなった。

研修後の英語力とソーシャルスキル得点のケンドールの順位相関係数は r=0.017～0.119 であり、有意な相関はなかった。

4．考　察

本研究では、短期海外研修プログラムによる看護学生の異文化間コミュニケーションスキルの向上について検討するために、1 年次の看護学生 106 名の研修前後の TOEIC 項目別正答率とソーシャルスキル得点を比較し、研修前後の得点には有意な差があることが示された。

(1) 研修前後の英語力とソーシャルスキル

研修後は研修前と比較して、リスニングの短い会話から内容を理解する能力、リーディングの文書の情報から推測・関連づける能力、文法の理解の正答率が有意に高くなった一方、長文の内容を理解する能力は有意に低くなった。

ソーシャルスキル得点では、5 つのサブスケールと総得点が研修前よりも有意に高くなっていた。著者らが 2012 年に看護学生 109 名を対象に実施した海外研修前後のソーシャルスキルの調査では、研修前と比較して研修後の「関係開始」「解読」の得点が有意に高く、「感情統制」が有意に低いという結果であったが（宮澤ら，2012）、今回の調査ではより多くのサブスケール得点が高くなっていた。Calvillo ら（2009）は、多文化理解の能力向上のための教育において教員は、多文化に接する機会を増やし、文化を理解して関わることができるように導くことが重要であると述べている。2015 年度以降の研修では、多文化理解により重点を置いたプログラム内容とするために、学生との交流の機会や文化に関連する英語の講義を増やし、講義は逐語訳によって 2 つの言語での理解を促すように変更されている。英語力の向上

表 2　プログラム前後の TOEIC Abilities Measured 正答率とソーシャルスキル得点　(n=106)

	Pretest			Posttest			Wilcoxon			
	Mean	SD	Median	Mean	SD	Median	Mean Rank	z	p	
TOEIC L&R Abilities Mesured 正答率										
L1 短い会話等の基本的文脈を推測できる	37.9	11.9	40.0	56.4	15.5	56.0	59.01	7.62	0.000	***
L2 長めの会話等の基本的文脈を推測できる	45.1	13.8	43.0	40.4	14.3	40.0	42.04	3.51	0.000	***
L3 短い会話等において詳細が理解できる	45.1	14.9	44.0	54.0	16.1	53.0	56.73	4.84	0.000	***
L4 長めの会話等において詳細が理解できる	39.7	10.9	40.0	37.1	13.1	37.0	49.05	2.49	0.013	**
L5 フレーズから目的や暗示された意味を理解できる	31.2	13.2	33.0	42.4	14.4	40.0	50.93	5.44	0.000	***
R1 文書の中の情報をもとに推測できる	28.2	10.5	27.0	33.0	13.0	31.0	58.13	3.02	0.002	**
R2 文書の中の具体的な情報を見つけて理解できる	28.7	13.4	29.0	30.4	14.2	29.0	54.99	0.96	0.336	
R3 文書にちりばめられた情報を関連付けることができる	28.9	8.9	28.0	34.5	10.7	33.5	63.79	4.77	0.000	***
R4 語彙が理解できる	34.8	14.0	36.0	32.8	10.8	31.0	47.62	1.47	0.143	
R5 文法が理解できる	34.0	12.6	33.0	44.4	15.4	42.0	61.43	5.97	0.000	***
ソーシャルスキル得点　(　)内は項目数										
関係開始　相手とすぐに話しうちとけられる (8)	21.4	4.8	22.0	22.1	4.6	22.0	44.89	3.44	0.001	**
解読　相手の気持ちを表情等から感じ取る (8)	23.0	3.6	23.0	24.0	4.0	24.0	47.98	4.98	0.000	***
主張性　自分の考えを適切な方法で表現する (7)	17.5	3.6	17.0	19.3	4.3	19.0	53.36	5.30	0.000	***
感情統制　感情をあまり面にあらわさない (4)	10.3	2.5	10.0	9.8	2.4	10.0	39.33	2.76	0.006	**
関係維持　相手の立場を考えて行動する (4)	12.7	1.6	13.0	13.0	1.7	13.0	39.09	2.53	0.011	*
記号化　表情やしぐさによって表現する (4)	11.9	2.4	12.0	12.4	2.3	12.0	41.25	2.28	0.230	*
総得点　(35)	96.7	12.0	98.0	103.6	14.0	103.0	53.16	7.49	0.000	***

のためには、英語のみを用いるべきという考え方がある一方で初学者にも上級者にも母国語への訳を使用することで効率的に学習できるという考えがある（Cook, 2010）。また、海外での言語学習において、学生はより簡単な表現で自信を持って話すことを求められ、豊富で速度の速い会話を耳にするという特徴があるとともに、これまでの教室とは違う生活の中での学習によって、より複雑で広い範囲の思考の表現を体験することができると言われている（Freed, 1998）。文化に関連する体験を増やしたプログラム内容であることは、「主張性」「関係維持」「記号化」のソーシャルスキルサブスケール得点の上昇に影響を与えると考えられた。

(2) 異文化間コミュニケーションスキル向上に対する短期海外研修の効果

本研究では、研修後に英語力やソーシャルスキル得点が高くなり、一部ではあるものの、研修によって異文化間コミュニケーションスキルが向上することが示された。

Ward ら（2001）は、自分とは異なる文化に適応するためには、文化を理解するためのトレーニングや歴史を学ぶことが有効であり、それらが異文化の中での行動やソーシャルスキルの獲得に結びつくと述べている。今回の研修では、日米の交流の歴史、文化に配慮したコミュニケーションと看護の方法について学び、文化を理解する方法について学ぶとともにホームステイ等で多様な文化を体験することから、より適応しやすい中でコミュニケーションが促進されて効果が得られたと推察する。

５．結　論

短期海外研修プログラムによる看護学生の異文化間コミュニケーションスキルの向上について、106 名を対象として検討した結果、研修後は研修前と比較して、①英語力では、リスニングの「短い会話等の基本的文脈を推測できる」「フレーズから目的や暗示された意味を理解できる」、リーディングの「文書にちりばめられた情報を関連付けることができる」など 6 能力の正答率が有意に高くなった。一方、長めの会話の理解については正答率が有意に低くなった。②研修後のソーシャルスキル得点は「感情統制」以外の 5 つの下位尺度と総得点で研修前よりも有意に高くなった。③研修後の英語力とソーシャルスキル得点に有意な相関はなかった。これらの結果より、短期海外研修での体験を通して、向上するコミュニケーション能力の詳細が明らかになった。

本研究は、海外研修プログラムに参加した群のみの事前事後テストによるものであることから、今後は参加しなかった群との比較によって検討したい。また、本研究で測定した英語力とソーシャルスキルは異文化間コミュニケーションスキルの一部であり、今後はより包括的に異文化間コミュニケーションスキルを測定できるような尺度開発を目指し、どのようなプログラムがどのようなスキルを向上させるのかについて、量的・質的なデータを用いて検討したいと考えている。

【文献】

相川充．（1996）．社会的スキルという概念．In 相川充，津村俊充（編），社会的スキルと対人関係：自己表現を援助する（pp3-21）．誠信書房.

相川充，藤田正美．（2005）．成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成．東京学芸大学紀要，第一部門，教育科学，56，87-93.

浅野昭祐．（2015）．マレーシア研修旅行が大学生の国際理解及び訪問国のイメージに及ぼす影響．人文研紀要，81，25-42.

Byram M. (1997). Teaching and assessing intercultural communicative competence. Multilingual Matters, Bristol, UK.

Calvillo E., Clark L., Ballantyne JE., Pacquiao D., Purnell LD., & Villarruel AM. (2009). Cultural competency in baccalaureate nursing education. Journal of Transcultural Nursing, 20(2), 137-145.

Campinha-Bacate J. (2002). A Model and Instrument for Addressing Cultural Competence in Health Care. Journal of Nursing Education, 38(5), 203-206.

Cid J. (2017). Statistical Analyses for the Updated TOEIC® Listening and Reading Test. Educational Testing Service, Princeton, New Jersey.

Chant S., Jenkinson TIM., Randle J., & Russell G. (2002). Communication skills: some problems in nursing education and practice. Journal of clinical nursing, 11(1), 12-21.

Cook G. (2010). Translation in language teaching: An argument for reassessment. Oxford University Press.

Cooper-Patrick L., Gallo JJ., Gonzales JJ., Vu HT., Powe NR., Nelson C., & Ford DE. (1999). Race, Gender, and Partnership in the Patient-Physician Relationship. JAMA, 282(6), 583-589.

Freed BF. (1998). An overview of issues and research in language learning in a study abroad setting. Frontiers: The interdisciplinary journal of study abroad, 4(2), 31-60.

法務省．（2019）．平成 30 年末現在における在留外国人数について；
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html.

Gerrish K., Chau R., Sobowale A., & Birks E. (2004). Bridging the language barrier: the use of interpreters in primary care nursing. Health & social care in the community, 12(5), 407-413.

Gilliland I., Attridge RT., Attridge RL., Maize DF., & McNeill J. (2016). Building cultural sensitivity and interprofessional collaboration through a study abroad experience. Journal of Nursing Education, 55(1), 45-48.

Hughes V., Delva S., Nkimbeng M., Spaulding E., Turkson-Ocran R.A., Cudjoe J. (2019). Not missing the opportunity: Strategies to promote cultural humility among future nursing faculty. Journal of Professional Nursing. https://doi.org/10.1016/j.profnurs.

香月毅史，荒井淑子．（2009）．看護学生の短期海外研修における英語学習に関する意識調査．上武大学看護学部紀要，5(1)，12-18.

Kawashima A. (2008). Study on Cultural Competency of Japanese Nurses (Doctoral dissertation). Available from ProQuest Dissertations Publishing, 3313848.

Koskinen L., & Tossavainen K. (2004). Study abroad as a process of learning intercultural competence in nursing. International journal of nursing practice, 10(3), 111-120.

Leininger M. (1978). Transcultural nursing: concepts, theories, and practices. New York: Wiley.

Leininger M. (2002). Culture care theory: A major contribution to advance transcultural nursing knowledge and practices. Journal of transcultural nursing, 13(3), 189-192.

宮澤純子，井上映子，坂下貴子，星野聡子，堀井素子，飯田加奈恵．（2012）．看護学生の早期体験学習（Early Exposure）としての海外研修の効果：ソーシャルスキルと異文化理解を中心に. 城西国際大学紀要, 21(1), 17-27.

宮澤純子，今井栄子，坂下貴子．（2014）．看護学生の早期体験学習（Early Exposure）としての海外研修の効果：チームワーク能力の変化を中心に．城西国際大学紀要 22(8)，23-34.

文部科学省（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会）．（2017）．看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～.

森久子，鈴木寿摩．（2014）．本学看護学生における異文化体験を通してのコミュニケーション能力と英語学習意欲．日本赤十字豊田看護大学紀要，9(1)，71-79.

日本政府観光局．（2019）．訪日外客統計の集計・発表；
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/index.html.

Ruddock HC., & Turner DS. (2007). Developing cultural sensitivity: nursing students' experiences of a study abroad programme. Journal of Advanced Nursing, 59(4), 361-369.

Tervalon M., & Murray-Garcia J. (1998). Cultural humility versus cultural competence: a critical distinction in defining physician training outcomes in multicultural education. J Health Care Poor Underserved, 9(2), 117-125.

Ward CA., Bochner S. and Furnham A.(2001). The psychology of culture shock(2nd ed.)(pp267-271), Routledge.

Williams TR. (2005). Exploring the impact of study abroad on students' intercultural communication skills: Adaptability and sensitivity. Journal of studies in international education, 9(4), 356-371.